

神は愛なり光なり

《 神秘と救いの世界 — 霊界物語 》

霊界物語 霊主体従

子の巻（第一巻）

第13章 ～ 第16章

### 第十三章 《天使の来迎》 [十三]

#### 現代語訳

59 私はさらに進んで二段目を深く追究してその本質をつかもうとし、また三段目も探険しようとした時、急に天上から何ともいえぬさわわたった音楽が聞えてきた。

そこで空を仰いでみると、白衣で着飾った天使が数人の御供を伴れて、私の方にむかって降りてこられるのを拝んだ。そうすると何十里ともわからぬ、はるか東南の方向に、ほんの小さい富士の山頂が見えるやうな気がした。

私のその時の心持は、富士山が見えたのであるから、富士山の芙蓉仙人が来たものと思った。そしてその前に降りてきた天使を見ると、①実に何とも言へぬ威厳のある、かつ優しい白髪<sup>しらが</sup>の、そして白髯<sup>しらひげ</sup>を胸のあたりまで垂れた神人であった。

神人は私に向って、『産土<sup>うぶすな</sup>の神の御迎えだから、一時帰ったほうがよい』との仰せであった。しかし私は折角ここまで来たのだから、もう一度詳しく調べてみたいと御願ひしてみた。

60 けれども御許しがなく、

『都合によって天界の修業が急ぐから、一まづ帰れ』

と言われる其の言葉が未だ終らぬうちに、紫の雲にわが全身が包まれて、ほとんど三十分とされる間、ふわりふわりと上に昇ってゆくやうな気がした。そうしてにわかには膝が痛みだし、ブルブルと身体が寒さに慄へているのを感じた。

その時には、まだ精神が朦朧<sup>もろうろう</sup>としていたから、よくは判らなかつたが、まもなく私は高熊山の巖窟の前に正座していることに、はっきりとわかった。

それから約一時間ばかり正気になっていると、今度はだんだん睡気<sup>ねむけ</sup>を催してきた、ふたたび霊界の人となってしまった。さうするとそこへ、小幡神社の大神として現はれた神様があつた。

それは私の産土の神様であつて、

『今日は実に霊界も切迫し、また現界も切迫しているから、いちおう地底の黄泉<sup>よみ</sup>の世界を 61 探究する必要はあるけれども、それよりも神界の探険を先にしなくてはならない。またそれについては、魂、肉体ともに修業を積まなくてはならない、神界修業の方に向へ』とおっしゃつた。そこで私は、『承知しました』と答へて、命令のまにまに随<sup>したが</sup>うことにした。

さうすると今度は私の体を誰ともわからぬ、非常に大きな手で、ちょうど鷹が雀<sup>ひつかも</sup>を引摺<sup>ひつか</sup>んだやうに、捉まへたものがあつた。

まもなく降された所を見ると、ちょうど三保の松原かと思れるやうな、綺麗な海辺に出ていた。ところが先の二段目で見た富士山が、もっと近くに大きく見えだしたので、今それを思うと②三穂神社だと思はれる所に、ただ一人行ったのである。するとそこに二人の夫婦の神様が現われて、③天然笛<sup>てんぜんふえ</sup>と鎮魂<sup>ちんこん</sup>の玉とを授けて下さつたので、それを有難く頂戴して懐に入れたと思う一瞬、急に場面が變つてしまい、不思議にも私の郷里にある産土神社の前に、体は正座していたのである。

62 ふと気がついて見ると、私の家はついそこなので、一度帰つて見たいやうな気がしたとたん、急に足が痛くなり、寒くなりして空腹を感じ、親兄弟姉妹の事から一家の暮らしまで憶い出されてきた。そうすると天使が、

『貴方が今人間に復<sup>かえ</sup>つては、神の経綸（計画）ができぬから神にかへれ』

と言ひながら、白い布を全身に覆いかぶされた。不思議にも心に浮んだ色々な事はすっかり忘れ、いよいよこれから神界へ旅立つということになった。しかし其の時持っている物といえば、ただ天然笛と鎮魂の玉の二つのみで、しかも何時のまにか私は羽織袴の黒装束になっていた。そこえもう一人の天使が、産土神の横に現われて、教えられるには、

『今は神界、幽界ともに非常に混乱状態<sup>おんかい</sup>に陥<sup>おち</sup>っているから、このまま放っておけば、世界は完全に潰れてしまふ』

と仰せられ、そうして、

『貴方はこれから、この神の命ずるままに神界に旅立ち、高天原に上りなさい』と厳しく命令された。

63 しかしながら私は、高天原に上るには何方<sup>どちう</sup>を向いて行けばよいか判らぬから、

『何を目標<sup>めあて</sup>にして行けばよいか、また神様が伴<sup>とも</sup>れて行って下さるのか』とたづねてみると、

『④天<sup>あめ</sup>の八衢<sup>やちまた</sup>までは送ってやるが、それから後は、さうはゆかぬから天の八衢で待ってをれ。さうすると神界の方すなわち高天原の方に行くには、鮮花色をした神人が立っているからよくわかる。また黒い黒い何ともいえぬ嫌な顔のものが立っている方は地獄で、黄胆病みのように黄色い顔をしたものが立っている方は餓鬼道で、また真蒼<sup>まつき</sup>な顔のものが立っている方は畜生道で、肝癪筋を立てて鬼のやうに怖ろしい顔のものが立っている方は修羅道であって、争いばかりの世界へゆくのだ』と懇切に教示され、また、

『お前が先ほど行って探険したのは地獄の入口で、一番容易<sup>たやす</sup>い所であったのだ。それでは今度は鮮花色の顔した神の立っている方へ行け。さうすればそれが神界へゆく道である』

64 と教へられた。そうして又、

『神界といっても苦しみはあり、地獄といってもそれ相当の楽しみはあるから、神界だからといってそう良い事ばかりあるとは思ふな。しかし高天原の方へ行く時の苦しみは苦しんだだけの効果があるが、反対の地獄の方へ行くのは、昔からその身魂に⑤罪業<sup>つみぐさ</sup>《過去に犯した罪》があるのであるから、単に罪業を償<sup>つぐな</sup>うのみで、苦勞しても何の善い報いもこない。もっとも、地獄でも苦勞をすれば、罪業を償うというだけの効果はある。またこの現界と霊界とは互いに関連して、いわゆる霊界と現界が相互に関係しあっているという⑥霊体不二であるから、現界の事が霊界にうつり、霊界の事はまた現界にうつり、幽界の方も現界の肉体に移ってくる。ここにさらに注意すべきは、神界に向かう道において神界を占領しようとする悪魔がいることである。それでお前が今、神界を探険しようすれば必ず悪魔が出てきてお前に妨害し、悪魔自身が神界を探険し占領しようとしているから、それをそうさせないように、お前が神界に遣<sup>つか</sup>はされるのだ。また神界へいく道路にも、広い道路もあればまた狭い道路もあって、65 決して広い道路ばかりでなく、ちょうど瓢箪をいくつも縦に列べたような格好をしているから、細い狭い道路を通っているときには、たった一人しか通れないから、悪魔だといっても後から追越すというわけには行かないが、広い所へ出ると、四方八方から悪魔が襲って来るので、かえって苦しめられることが多い』

と教えられた。間もなく、神様の天使はお姿を隠され、私はただ一人天然笛と鎮魂の玉を持ち、天蒼く水青く、山また青き道路を羽織袴の装束で、神界へと旅立ちすることとなった。

聖師は地獄の二段目を探求するつもりでいたようだが、神からは『都合によって天界の修業が急ぐから、一まづ帰れ』と言われる。その理由として『今日は実に霊界も切迫し、また現界も切迫しているから』、また『今は神界、幽界ともに非常に混乱状態に陥<sup>おち</sup>っているから、このまま放っておけば、世界は完全に潰れてしまう』と言われる。大本出現の意義がそこにあるわけであるが、世界は悪神によって二進も三進もいかない状況下にある。イルミナティやフリーメイソン、ジハード（三種の邪気）と言った人々は陰になり日向になって世界を破滅へと向かわせているようです。それも切迫して状況のようです。

玉鏡 551「世の大峠<sup>おほたうげ</sup>と信仰」

神様は人間を神に似せて造り給うた。然るに国祖御隠退以後の世界は、八頭八尾の大蛇や金狐の悪霊、六面八臂の邪鬼のすさびに犯されて、だんだんと神様と離れて悪魔に近い人間になつて仕舞つた。人道日に廃れ、世の為め人の為め、国のためなど考ふるものはなく、ひたすらに私利私慾にのみ耽<sup>ふけ</sup>る世の中になつて仕舞つた。この儘<sup>まま</sup>で進んでいったならば、世界も人類も滅亡するより外は無。これはどうしてもここに一大転換が来て、全人類が廻れ右<sup>だんご</sup>を断乎として行はなければならぬ事になるのである。悪魔を離れ

て神様に向はなければならぬ時が来る。かかる轉換の期に當つて、人類は可なり重大なる苦しみ艱みの上に立たせらるる事は必然である。日常神を信じ神に従ふ大本の信者の上にも同じ艱みは落ち来るのである。大本信者のみが独りこの苦しみを脱れて、特別の場面に置かるるやうな虫のいい考へをして居たものも往々にして昔はあつたが、さういふ訳には行かぬ。唯眞の信仰にあるものは、かかる際神様にお縋りする事の出来る強みをもつて居る。そして常に教へられつつあつた事によつて、先が如何になり行くかの見当をつける事が出来る。この二つの信念の爲め、唯自己をのみ信ずる無神無靈魂者より、遙に容易くこの難関を切りぬける事が出来るのである。

人間の力をのみ頼みて生活しつつある人々が、人力をもつて如何ともする事の出来ない事実に遭遇する時、其艱みや名状すべからざるものがあらう。

人間は造られたるものである。造り主たる神様の御意志にしたがつて行動してさへ居れば、間違ひないのである。来らむとする大峠に際し、信仰無き人々をそぞろに気の毒に思ふ。

玉鏡 552「現はれかけたミロク様」

今やミロクの大神様は地平線上に現はれ給うて、早や肩のあたり迄を出されて居るのである。腕のあたり迄お出ましにならねば、本当のお働きは出来ぬのである。腕は力の象徴である。

また、『御身が今人間に復つては、神の経綸ができぬから神にかへれ』とあるように、聖師が救世の神で有ることがここでも判る。

八衢は天国や地獄へ行く入り口があり、そこには以下の人が立っている。

- 1、神界（高天原）： 鮮花色をした神人
- 2、地獄： 黒い黒い何ともいへぬ嫌な顔のもの
- 3、餓鬼道： 黄胆病みのように黄色い顔をしたもの
- 4、畜生道： 眞蒼な顔のもの
- 5、修羅道： 肝癩筋を立てて鬼のやうに怖ろしい顔のもの

苦中楽あり、楽中苦ありで天国にも苦しみがあり、地獄にも楽しみがある。天国の苦はその分報われるが、地獄の苦は罪業を取ってもらえる罪の借金済みのようだ。地獄に落ちた魂は借金をゼロにしなければ次へのステップが踏めないのもこれも必要なことなのであろう。そしてその道は遠く苦しい道であらう。しかし、神の慈悲で現世に生まれ変わって修行をすれば早道となる。

## 用語解説

① 神 人（実に何とも言へぬ威厳のある、かつ優しい白髪の、そして白髯を胸前まで垂れた神人であつた）

白髪異様の神人とは異霊彦命（本田親徳）であらうか、富士山が見えたと有る。本田親徳は富士浅間神社の官司であつた。または、小松林の命か？

② 三穂神社

静岡県静岡（清水：合併）市にある日本新名勝の一つ三保の松原にある神社、御穂神社か？

羽衣伝説で有名。御祭神は 大己貴命（大国主命、三穂津彦命） 三穂津姫命

③ 天然笛と鎮魂の玉

■天然笛

◇本田親徳

神憑り三十六法を定義し、霊界に正神・邪神の百八十一階級の区分があることを説いた神道霊学の最高峰、本田親徳は、『鎮魂帰神の作法に必要な用具たるべし』と、岩笛による帰神法を復活させました。

「ヒト、フタ、ミ、ヨ、イツ、ムユ、ナナ、ヤ、ココノ、タリ、モモ、チ、ヨロツ」

を、心に念じながら、岩笛の響きの中に「ユー」という音を含ませて吹くようにすることが本田流における口伝となっています。ちなみに親徳の岩笛は、二拳を合わせたくらいの大きさのもので、穴は斜めに抜け通り、少し青みを帯びた黒色のもので神光奇しき逸品であったそうです。

◇出口王仁三郎

大本教の創設者、出口王仁三郎は、親徳の孫弟子であり、彼から鎮魂・帰神法と審神学を集中的に学び奥義書を授かります。彼は岩笛について次のように述べています。

“天の岩笛”なるものは一に“天然笛”と云い、又、“石笛”とも称えて、神代の楽器である。天然の石に自然穴のあいたもので、之れに口をあてて吹奏する時は、実に優美なる声音を發するものである。また、此れ岩笛を吹奏するには、余程鍛錬を要するものである。吹きざまによりて千差万別の音色を出すものであるが、総じて耳に立って<sup>やかま</sup>喧しい。むやみに“ピューピュー”と吹くのは良くないのである。極めて耳に穏やか<sup>こた</sup>に対えて、何となく優美な音色を發せしむるのは最もよろしいのである。“ユーユー”と長く跡の音を引いて“幽”と云う音色を發生しせめるのが、第一等である。神人感合の道は至善至重なる術であるから、審神者も神主も最も厳肅の態度を持して掛からなければ、宇宙の主宰に感合し、また八百万の神に親近する道であるから、神界へ対して不敬を加える恐れがあるから、最も注意周到で無くてはならないのである。 【本教創世紀】

■鎮魂の玉

由来は伊邪那岐尊が、天照大御神に対して高天原を統治すべき印（璽）として、自ら首に掛けていた玉を取って与えられた。したがってこの玉は、伊邪那岐尊がその靈魂を付着させて、高天原の主宰神であることを神定したものである。この玉は後に天照大御神より瓊瓊杵尊<sup>ににぎのひもと</sup>に渡された。

鎮魂の玉は、個人が身を修めることを初め、大きくは無形の神界を探知する基礎であるから、鎮魂法で用いる玉とは、天照大御神が賜った玉と實質的に変わることはない。

『鎮魂に要する玉は、純黒にして正円なるを最もよしとするのである。重量は、七匁位から十匁位の間のもので一等である。三宝の上に其の玉を安置して、修行者は瞑目静座、一心不乱に其玉に向かって吾（わが）魂を集中するのである。恰も蛇が蛙に魅られるが如く、猫が鼠をねらう如くに一切の妄想なり感覺を蕩<sup>とう</sup>尽<sup>じん</sup>《使い果たす》して修するのである。』 【出口王仁三郎著作集第一卷 本教創世紀】

④ 天の八衢<sup>あめ やちまた</sup>

霊の礎<sup>たま いずみ</sup> (一) に以下のように示されている

- 中界は神道家の唱ふる天の八衢であり、仏者の謂ふ六道<sup>ろくたう</sup>の辻<sup>つじ</sup>であり、キリストのいふ精霊界である。
- 故に天の八衢は高天原にもあらず、また根底の国《地獄》にもあらず、両界の中間に介在する中程<sup>なかほど</sup>の位地にして即ち情態である。人の死後直に到るべき境域<sup>きやうみき</sup>にしていわゆる中有<sup>ちゆうう</sup>である。中有に在ること稍久しき後現界<sup>のち</sup>にありし時の行為の正邪により或は高天原に昇り、或は根底の国へ落ち行くものである。
- 人霊<sup>じんれい</sup>中有の情態（天の八衢）に居る時は天界にもあらず又地獄にもあらず、仏者の所謂六道の辻または三途の川辺に立ちて居るものである。
- 天の八衢（中有界）に在る人霊は頗<sup>すこぶ</sup>る多数である。八衢は一切のものの初めての会合所であつて、此処にて先づ靈魂を試験され準備さるるのである。人霊の八衢に彷徨<sup>はうわう</sup>し居住する期間は必ずしも一定しない、直に高天原へ上るものもあり、直に地獄に落ちるものもある。極善極真は直<sup>ただち</sup>に高天原に上り、極邪極悪は直に根底の国へ墜落<sup>し</sup>して了<sup>しま</sup>ふのである。或<sup>あるひ</sup>は八衢に数日又は数週日数年間居るものである。されど此処に三十年以上居るものは無い。此の如く時限に於て相違があるのは、人間の内外<sup>ないわい</sup>分<sup>ぶん</sup>の間に相応<sup>きやうおう</sup>あると、あらざるとに由るからである。
- 天界地獄の区劃<sup>くわく</sup>は此の如く判然<sup>かく</sup>たりと雖<sup>ごと</sup>も、肉体の生涯<sup>いへど</sup>に在りし時に於て朋友<sup>ほういう</sup>となり知己<sup>ちき</sup>となりしもの

や、特に夫婦、兄弟、姉妹となりしものは、神の許可を得て天の八衢に於て会談することが出来るものである。

○人間の死後、高天原や根底の国へ行くに先だつて何人も経過すべき状態が三途ある。そして第一は外分の状態、第二は内分の状態、第三は準備の状態である。この状態を経過する境域は天の八衢（中有界）である。然るに此の順序を待たず直に高天原に上り、根底の国へ落つるものもあるのは前に述べた通りである。直に高天原に上り又は導かるものは、その人間が現界に在る時神を知り、神を信じ善道を履み行ひ、その靈魂は神に復活して高天原へ上る準備が早くも出来て居たからである。

また善を表に標榜して内心悪を包蔵するもの即ち、自己の凶悪を装ひ人を欺くために善を利用した偽善者や、不信仰にして神の存在を認めなかつたものは、直に地獄に墜落し無限の永苦を受くる事になるのである。

【16/ 靈の礎（一）】

抑も此八衢の関所は天国へ上り行く人間と地獄へ落ちる人間とを査べる二つの役人があつて、天国へ行くべき人間に対しては、色の白き優しき守衛が之を査べ、地獄へ行くべき人間に対しては形相凄じい赤い顔した守衛が之を査べる事になつてゐる。【47/10 震土震商】

尚、第6章の用語の解説にある、①八衢も参照されたい。

#### ⑤ 罪業

仏教用語で悪い結果を生む行ない。身・口・意の三業で作る罪。（身業：身体によるすべての活動。口業：言語的行為。それに善悪があり、苦楽の果報をもたらす。意業：心のはたらき、一切の思念をいう。）ここでは三業によって作りだされた前世や過去の罪 【ウィキペディア？】

#### ⑥ 霊体不二である

第一二章の顯幽一致と同じ意味。

「霊体不二であるから、現界の事が霊界にうつり、霊界の事はまた現界にうつり、幽界の方も現界の肉体に移ってくる。」とあり、霊界と現界は相互に関係し合っていることがわかる。

第十四章 《天界旅行（一）》 [十四]

現代語訳

一、

66 瓢箪のような細い道をただ一人なんとなく心がせかせかした気持ちで進んでゆくと、背後の山の上から数十人の叫び声が誰を呼ぶともなしに聞えてくる。

そこでなんとなく後をふり返って見ると、もう二、三百メートルも来たと思ったのに、いつの間にか、また元の八衢に返っていた。そこには地獄へ墜ちて行くものと見えて、真黒の汚い顔をしたものが倒れている。これは現界で今肉体が息を引取ったもので、その精霊がここに横たわっていたのであり、また先ほどの大きな叫び声は、親族や古い仲間が死者の魂を呼びもどす儀式をしている声であることが分った。さうすると見ている間に、その真黒い三十五六の男の姿が何百メートルともわからない地の底へ、地が割れると共に墜ち込んでしまった。これが私には不審でたまらなかった。というのは、地獄に行くのにはそれなりの道がついているはずである。それなのに、たちまちあつという間に地の底へ墜ちこむというのが、不思議に思われたからである。とにかくこういうふうになる人は現界の肉体から見れば、脳充血とか<sup>のういっけつ</sup>脳溢血とか 67 心臓破裂とかの病気で、遺言もなしに急死したやうなものである。そこで天然笛を吹いてみた。天の一方から光となって芙蓉仙人が現われた。

①『一体地獄というものには道は無いのでしょうか』 とたづねてみた。仙人はいう。

『この者は先の世においても、この世においても悪事をし、殊に氏神の社を壊した大罪がある。それは旧い社だからといって安価で買取り、金物は売り、材木は焼き棄てたり、または薪の代りに焚いたりした。それから一週間も経たぬうちに病床について、黒死病のような病となった。そのために息を引取るとともに、地が割れて地獄の底へ墜ち込んだのである。だからこれは地獄の中でも一番罪が重いので、口から血を吐き泡を吹き、虚空（何も無い空）を掴んで悶えながら死んだのだ。しかもその肉体は伝染の心配があるというので、上級の役人がきて石油をかけ焼き棄てられた』 との答えである。そこで私は、

二、

『悶え死をしたものは何故こうゆうふうにすぐに地の底へ墜ちるのでしょうか』 68 と尋ねてみた。仙人は答えて、

『すべて人は死ぬと、②死有から中有に、中有から生有という順序になるので、この世で息を引取るとともに死有になり、死有から中有になるのは殆ど同時である。それから大抵七七、四十九日の間を中有といい、五十日目から生有と言って、親が決まり兄弟が決まるのである。ただし元来そこには山河、草木、人類、家屋のような全てのものは存在するが、眼には見えず単に親兄弟がわかるのみで、そのときの、幽体（死者の霊）は、ちょうど三才の子供のように縮小されて、中有になると同時に親子兄弟の情が、靈的感覚として湧いてくるのである。

さうして中有の四十九日間は霊界で迷っているから、この間に近親者が十分な③追善供養をしてやらなければいけない。又これが親子兄弟の務めである。この中有にある間の追善供養は、生有に大いに関係がある。すなわち大善と大悪には中有はなく、大善は死有からすぐに生有となり、大悪はすぐに地獄すなわち根底の国に墜ちる。だから本当の善人は眠るように美しい顔をしたまま④国替（死亡）して、すぐに天国に69生まれ変わるのである。またもっとも極悪な人は前記のような径路をとって、悶え苦しみついで、ただちに地獄に墜ちて行くのである』と

三、

私はそれだけのことを聞いて、高天原の方へむかい神界旅行に行こうとした。ところが顔一面に凸凹のできた妙な婦人が、八衢の中心に突然現われた。私の姿を見るなり、長い舌をペロリと吐きだし、とりわけ凹んだ眼の玉を、ギロギロと異様に光らせながら、足早に神界の入口さして一目散に駆けだした。

私は……変な奴が出てきたものだ、一つ跡を追って彼の正体を確かめてやろう……と、やや好奇心にかられて、ドンドンと追跡した。その怪しい女はほとんど空中を走るように、一目散に<sup>かたわら</sup>傍の山林に逃込んだ。私はとうとう怪しい女の姿を見失ってしまい、途方にくれて芝生の上に腰を降し、<sup>いたち</sup>鼯に最後尻を嗅されたような青白いつ

まらぬ顔をして、四辺の光景をキヨロキヨロと見まわしていた。どこともなく妙な声が耳に聞こえてきた。

耳を澄まして聞いていると、鳥の啼き声とも、猿の叫び声ともわからない怪しい声である。70 恐いもの見たさに、その聞える方向を辿って荊を押しわけ、岩石を踏み越え溪流を渡り、険しい坂をよじ登り、色々と苦心して漸く一つの平坦な地点に走りついた。

見ると最前みた怪女を中心に、多くの異様な人らしいものが、何かしきりに囁き合っていた。私は大木の蔭に身を潜めて、彼らの様子をじっと見ていると、中央に席を取った凸凹の顔をした醜い女の後から、太いふとい尻尾が現われた。彼はその尻尾をピヨンと左の方へ振った。、割合が人が三で化物が七というような沢山な怪物が、その尻尾の向いた方へ雪崩を打って、一生懸命に駆け出した。

怪女はまたもや尻尾を右の方へ振った。多くの動物とも人間とも区別のつかぬやうな怪物は、先を争うようにして又もや、右の方へ一目散に駆け出した。怪女はまたもや尻尾を天に向ってピヨンと振りあげた。

多くの怪物は一斉に、天上目がけて投げ上げられ、しばらくすると、その怪物は雨のように降って来て、ある者は溪谷に落ちて負傷をするものもあり、ある者は荊棘の草むらに落込んで全身を傷つけ、血に塗れて行くことも帰ることも出来ず、苦しみもだえているものもあった。71 中には大木にひっかかり、息もたえだえて今にも死にそうな様子で苦しみに呻いているものもある。中には墜落とともに頭骨を折って傷つき、体から鮮血がしたり落ちて飛び散り、血で泉のようになった。

怪女は、さも嬉しそうな顔色をして、流れる血潮を片っ端から美味そうに呑んでいた。怪女の体は見るみる太り出した。彼の額には俄にニュツと二本の角が発生した。口はたちまち耳の辺まで裂けてきた。牙はだんだんと伸びて剣のやうに鋭く尖り、かつ、キラキラと光りだした。

四、

私は神界の旅行をしているつもりだったのに、なぜこんな鬼女のいるような処へ来たのだらうかと、胸に手をあてて暫く考えていた。前後左右に、怪しい、いやらしい体中の毛が逆立つような音がまたもや、耳を掠めるのである。私はどうしても納得がゆかなかった。途方にくれた揚句に、神様のお助けを願おうという心がおこってきた。

私は四辺の恐ろしいそして殊更に穢らわしい光景を、見ないようにと思つて目をとじ心をおちつけて静かにすわって、大声に⑤天津祝詞を奏上した。しばらくして「眼を開け」と教える声が緩やかに聞えた。私はあまりに眼の前の光景の恐ろしさ、無残さを再び目撃することが 72 不快でたまらないので、なおも目を閉じる態度を持ちつづけていた。

そうすると今度は、前とはやや大きな、そして少し尖りのあるやうな声で、  
『迷ってはいけない、早く事物の道理を見抜く活きた眼を開いて、神世の厳かな状況に眼を醒ませ』  
と叫ぶものがあつた。私は心のうちに妖怪変化が人を惑わすもの思いこみ、……そんなことに乗るものかい、尻でも喰へ……と素知らぬふうをしてなおも瞑目をつづけた。

『迷っているものよ、時は近づいた。一時も早く眼を開いて、神界の経綸の容易でない実情を熟視しなさい。神国は眼の前に近づいた。しかし見る眼のないものは、憐れなものだ。お前はいつまで八衢に迷い、神の命ずる神界の探険旅行に出かけないのか』

と言うものがある。私は心の中で……神界旅行を試み、今このような不愉快なことを目撃しているのに、神界の探険をせよとは、何者の言ぐさか。馬鹿を言うな、古狸奴、大きな尻尾をさげて居よって、おれが知らんと思つて居やがるか知らんが、おれは天眼通でチヤンと看破しているのだ。鬼化け狸に他人は欺されても、おれは貴様のやうな古狸には、誑らかされないぞ。見る眼も汚れる……と考へた。そうするとまた前のような声に、73 すこし怒りを帯びたやうな調子で、  
『貴様は道理を知らぬ奴だ』と呶鳴る。

そのとたんに目を思はず開いて見ると、前の光景とはすっかり変つたあまりにも立派で比喩物がない、神の居られる場所が眼の前に現われた。その瞬間、松に吹く風の音に気がつくと、意外にも、私は高熊山のGamma岩の上に座っていた。



一、

『この者は先の世においても、この世においても悪事をし、ことに氏神の社を壊した大罪がある。それは旧い社だからといって安価で買取り、金物は売り、材木は焼き棄てたり、または薪の代りに焚いたりした。それから一週間も経たぬうちに病床について、黒死病のような病となった。そのために息を引取るとともに、地が割れて地獄の底へ墜ち込んだのである。だからこれは地獄の中でも一番罪が重いので、口から血を吐き泡を吹き、虚空を掴んで悶えながら死んだのだ。』とあり、特に神様を粗末に扱うような大罪を犯すと中有を経ず直接何百丈もある地の底へ、地が割れると共に落ちて行くのです。

脳充血とか脳溢血とか心臓破裂とかの病気で、遺言もなしに悶え苦しんで急死した人は大概直接地獄に落ちるようです。現在は脳溢血とは云わないで脳梗塞や心筋梗塞と云い、現代医学では助かりますが霊的には大変な罪を犯しているのではないのでしょうか。

二、

人は死ぬと 死有 → 中有 → 生有 と変わる。

死有： 息を引取るとともに死有となる。

中有： 死有と同時に中有となり、四九日間中有にいる。

生有： 死から五〇日目で生有となり、親、兄弟が決まり、中有に残るか天国に登るか、地獄に墮ちるかが決まる。

「ただし元来そこには山河、草木、人類、家屋のような全てのものは存在するが、眼には見えず単に親兄弟がわかるのみで、そのときの、幽体《死者の霊》は、ちょうど三才の子供のように縮小されて、中有になると同時に親子兄弟の情が、霊的感覚として湧いてくるのである」この文章は少し理解しがたい。ただしの後ろに「死有では」という主語があったのではないか。「ただし死有では元来そこには山河、草木、人類、家屋のような・・・」

中有にいる四九日間の追善供養の大切さが述べられています。それは親子兄弟の務めであり、生有に大いに関係する。大善と大悪には中有がないので、「今の世（末法）の人は生有になって天国に登る御魂は希で、ほとんどが中有に居て、そのまま修行するか地獄に行く事になる」と述べられていることに心したい。

三、

狸や狐のような⑥兇党界の霊を拝むと上記のような苦しみを受けなければならない。乱りにおかしな宗教を信仰せぬ事が大切です。

四、

『迷っているものよ、時は近づいた。一時も早く眼を開いて、神界の経緯の容易でない実情を熟視しなさい。神国は眼の前に近づいた。しかし見る眼のないものは、憐れなものだ。お前はいつまで八衢に迷い、神の命ずる神界の探険旅行に出かけないのか』

現在の社会情勢を視ると、何とも目を開けてみてられない状況です。政治に経済に、思想にあらゆる分野で悪魔横行のわれよし世界です。しかしこの状況に眼を閉じて居てはいけません。神様は来るべき世を預言し、一步一步前進している。大本の教えを確りと眼を開け見つめ直すことが我々に課せられ義務であろう。

## 用語解説

① 一体地獄というものには道は無いのでしょうか

霊の礎には

人間の死後、高天原や根底の国へ行くに先だって何人も経過すべき状態が三途ある。そして第一は外分の状態、第二は内分の状態、第三は準備の状態である。この状態を経過する境域は天の八衢（中有界）である。然るに此の順序を待たず直に高天原に上り、根底の国へ落つるものもあるのは前に述べた通りである。

直に高天原に上り又は導かるるものは、その人間が現界に在る時神を知り、神を信じ善道を履み行ひ、その靈魂は神に復活して高天原へ上る準備が早くも出来て居たからである。

また善を表に標榜して内心悪を包蔵するもの即ち、自己の凶悪を装ひ人を欺くために善を利用した偽善者や、不信仰にして神の存在を認めなかつたものは、直に地獄に墜落し無限の永苦を受くる事になるのである。

【16/ 霊の礎 (一)】

外分は体的状態で、内分は靈的状态です。中有にあつては外分は現世にいる時は心(魂)の醜悪さも肉体によって隠されていおり(外面如菩薩、内心如夜叉的状态)、死後しばらくはこの状態です。しかし、次第に内分は外分の状態から脱して本当の心(魂)の状態が現れてきて、次に天国または地獄へ行く準備状態に入る。これが中有界に於ける三途です。【第六章 用語の解説① P62 参照】

死者は死後一旦中有界に来るが、極善者および偽善者、極悪人は中有界に留まることなく直ちに天国に登り、また地獄へ落ちて行く。極善、極悪に中有無しです。

② 死有から中有に、中有から生有といふ順序になる

死んだ直後(死有)は三才の子供のように縮小し、何も見えないが直ぐに中有となり山河、草木、人類、家屋や親子兄弟の情が、靈的感觉として湧いてくるようだ。ここに四十九日間生活し、五十日目から生有となって天国、中有界、地獄の何れかに行くことになる。

③ 追善供養

上記の四十九日間は一種の準備期間であるから、この間に少しでも高い世界に上れるよう現世にいる者が供養し、神にすがることが大切です。神道では死後十日目毎に供養(大本では十日祭、二十日祭、三十日祭、四十日祭、五十日祭と毎十日祭を行う)し、神にすがりより高い位置に進むことを祈ります。仏教では七日毎に罪を検められ五〇日目に魂の安住所が決まります。大本では五〇日祭とその家の先祖を祀る自宅の祖霊舎に合祀をする合祀祭を行います。その後、百日祭、一年祭と続きます。参考：以後、二年祭、三年祭、四年祭、五年祭まで毎年。十年祭、十五年祭、二十年祭、三十年祭、四十年祭、五十年祭、百年祭、百五十年祭と以後五十年ごと、千年祭の後百年毎に執行する。

④ 国替

死ぬこと。現界から幽界に国(生活場所)を替える。

⑤ 天津祝詞

天津祝詞は神言同様、天地一切の罪汚れを祓う祝詞です。大きくは天地万有から天下国家、小さくは個人の罪穢れまでを祓う重要な祝詞です。天津祝詞は「大本のりと」を参照してください。

第30巻にある天津祝詞解より天津祝詞の大意を掲載する

宇宙天地万有一切の大修祓は、靈系の御祖神の御分担に属する。現在『地の世界』に於て執行されつつある国祖の神の大掃除大洗濯も詰まり宇宙全体としては伊邪那岐命の御仕事である。幾千万年来山積した罪穢があるので、今度『地の世界』では非常な荒療治が必要であるが、これが済んだ暁には刻々小掃除小洗濯を行へば宜しいので、大体に於てはうれし嬉しの善一ツの世の中に成るのである。即ち伊邪那岐命の御禊祓は何時の世如何なる場合にも必要あるものである。これがなければ後の大立直し、大建設は到底出来ない訳である。

さて此修祓は何によりて執行されるかと云ふに、外でもない宇宙根本の大原動力なる霊体二系の言霊である。天地の間(即ち阿波岐原)は至善至美、光明遍照、根本の五大言霊(アイウエオ)が鳴り直つて居るが、いざ罪穢が発生したと成ると、言霊でそれを訂正除去して行かねばならぬ。人は宇宙経綸の重大任

務を帯びたるものであるから、先頭第一に身霊<sup>みたま</sup>を磨き、そして正しき言霊を駆使すれば、天地も之に呼応し、宇宙の大修祓も決行される。其際にありて吾々五尺の肉体は小伊邪那岐命の御活用となるのである。雨を呼べば土砂降りの大雨が降り、地震を呼べば振天動地の大地震が揺り始まる。これが即ち『御禊祓給ふ時に生坐せる祓戸の大神達』である。かくして一切の枉事罪<sup>まがことつみけがれ</sup>穢は払ひ清めらるる事になるが、かかる際に活動すべき責務を帯びたるは、八百万の天津神、国津神達でこれ以上の晴れの仕事はない。何卒確り御活動を願ひますといふのが、大要の意義である。何人も日夕之を奏上して先づ一身一家の修祓を完全にし、そして一大事の場合には、天下を祓清むるの覚悟がなくてはならぬのであります。

【30/天津祝詞解】

この高彦天使は、後に天照大御神様が岩戸隠れを遊ばした時、岩屋戸の前で天津祝詞を奏上し玉ひし天児屋根命の前身なり。【6/36 黄金の宮】

『オイ、オイ大蛇の先生、同じ天地の間に生を稟けながら、なぜ此様な見苦い蛇体になつて生れて来たのだ。俺は神様の救ひを宣べ伝ふる貴き聖き宣伝使だ。貴様も何時までも此様な浅間しい姿をして深山の奥に住居をしてゐるのは苦からう。日に三寒三熱の苦みを受けて、人には嫌はれ、怖がられ、ホントに因果なものだナ。俺は同情するよ。是から天津祝詞を奏上してやるから、立派な人間に一日も早く生れて来い。其代りに俺たち五人を背に乗せて、珍の国の都の見える所まで送るのだよ。よいか』 【8/36 大蛇の背】

亀彦『エ一人を馬鹿にして居よる、………オイ音サン、駒サン、言霊の一斉射撃だ。鶴翼の陣を張つて、一声天地を震撼し、一音風雨雷霆を叱咤する、無限絶対力の天津祝詞の太祝詞、善言美詞の言霊の発射だよ』

【13/19 馳走の幕】

⑥ 兇党界

水鏡 84「兇党界」に

兇党界は、肉体的精霊の団体であるから、人間から見て不思議と思ふいろんな事をして見せる。假へば誰も居ないのに机が自然に持ち上つたり、椅子が歩き出したり、空中から仏像が降つて来たりする。かういふ現象を見る人は、不可思議千万と思ふであろうが、何も不思議は無いので、皆肉体的精霊たる兇党界の仕業である。だから机などが持ち上つた時に其下の所を刀にて切れれば、血を滴らして逃げて行く、無論姿は見えぬ。日本に於ける兇党界の頭は山本五郎衛門と云ふので、本拠は筑波山である。五郎衛門が最近人間として此世に姿を現したのは、今より百五十年前であつて、それが最後である。山本五郎衛門御宿と書いて門に張り出しておくと悪魔が来ないと云はれて居る。それは親分の宿であるから乾兒の悪魔共が遠慮して来ないのである。私もいろんな不思議な事をした時代がある。其火鉢をそつちに持つて行けと命ずると、火鉢は独り動いて他に移る。お茶を注げと命ずると、土瓶が勝手に空中飛行をやつて、お客の茶碗にお茶を注いで廻る。そんな事は極容易いもので、其外【いろんな】不思議な事をやつたが、神様がさういふ事ばかりやつて居ると、兇党界に陥つて仕舞ふぞと仰有つて固く戒められたので、断然止めて仕舞つた。

玉鏡 676 兇党界と人間

兇党界の霊とたびたび交渉をもつと離れる事が出来なくなつて仕舞ひ、終ひには兇霊は修行とか何とか云うて、人間を山の奥などに誘き出し、殺して仕舞ふのが落ちである。

伏見に春海と云ふ行者があつて、朝の十時頃から三時頃迄病人の祈祷などをして金を儲けるが、それが済むと其金をもつて方々の飲食店に物を食べに行く。天麩羅、蕎麦、寿司、汁粉と、あらゆるものを食べて食べて儲けただけの金を使つて仕舞はねば止まぬので、どんなにおそくなつても、これだけの行事を済まさねば、腹中の霊が承知しないのであつた。気の毒にも彼は全く兇霊の容器であつた。金を儲けさすのは、春海の肉体を使用して自分らの欲望を満足させむが為めであるのだ。三十年前の話で、其時五十歳位であつて、もう疾うに故人とな

つたが、兇党界の霊と交渉をもつ人へのよい戒めであると思ふ。

#### 玉鏡 684 筑波山の悪霊

筑波山は兇党界の大將山本五郎右衛門が本拠である事は度々話した通りである。平太郎によつて封じ込まれて柔順しくなつては居るのであるが、それでもあの山に登ると憑依されて狂態を演ずるやうになる。丹波の大江山も悪霊の本拠であるから登つてはいけない。押して登れば憑依される。

#### 参考

##### ◇修祓、潔斎の意義

ツミ・ケガレを祓い清めることを修祓または潔斎という。すべて祓戸の神のおはたらきです。

祓戸の神とは瀬織津姫、速秋津姫、伊吹戸主、速佐須良姫の四柱の神の総称で、ツミ・ケガレを祓い清めることを司どる神である。ということは、主神がツミ・ケガレを祓い清めるときにこの四柱の神のはたらきを現わされると理解してもよろしいわけである。

大本では礼拝に際して必ずといつてもよいほど、まず天津祝詞を称える。この祝詞は主神をはじめ八百万の神々に祓戸の神として一切のツミ・ケガレを祓い清めて下さい、と願う詞で真心をもってこれを称えるときに言霊の幸わいにより祓い清めの神業が現われるのである。

（罪けがれ咎めあやまちも朝夕の 祝詞に春の雪と消えゆく）

ツミ・ケガレを恕し清める力は、神のみ持たせたもうのである。それで、天津祝詞や神言（大祓の祝詞ともいう）を言霊清しく称えて、神力の発動を祈るのは大切なことであるが、自覚ある人としては、なおそれだけでは足りない。

知って犯したツミ・ケガレはいうまでもなく知らず知らずに犯しているツミ・ケガレ、またわが靈魂に負うているめぐりに対して神さまにお詫びをしてそのみ恕しを祈るべきである。

心の底からのお詫びは、神は必らずお受け下さっていかなる重いツミ・ケガレもお恕しになり、すずやかな靈魂とならしていただくのである。「おわびが一等であるぞよ」と諭されている。

潔斎は人がみずから斎戒沐浴してわが心身を清めることと、祓戸の神の発動によってある災害的形をとって、鬱積した邪気が祓い清められることの二つの意味がある。

第二の意味の潔斎に、また三つの種額がある。

風、水、火によって天地六合の邪気を清めるのが大潔斎であり、飢、病、戦、または風、水、火によって国家、社会が浄化されるのが中潔斎であり、一身一家の清められるのが小潔斎である。

いずれも、たまつた邪気が限度を越し発火点に達して爆発するのがこれらの潔斎現象であり、めぐり《罪や穢れ》の深い所ほど、深い人ほどきびしい潔斎を受けるのもまた相応の理のしからしめることである。

##### ◇大難を小難に、小難を無難に

開祖も聖師も生涯をつらぬいた祈りは、人類の大劫《とてつも長い時間か》のためにどうぞ大難を小難に小難を無難に、まつり替えていただきますようにということであった。歴代の教主も、また、この祈りを継がれている。

開祖も聖師もこのお祈りのためにみずからを犠牲として捧げられた。これは、千座の置戸を負うということであり、贖罪または贖いということである。平たくいえば万民に代わつて霊的借金を自分の身に引き受けることであり人々の代わりに悩みを受けることである。

神律《おきて》というものはまことに厳しくふかい、罪障はまったく何事もなくしては消えない。本人の払えない借金はだれかが代わつて、型ばかりでも払わなければならない。贖罪者はそういう深い神意と神律によってこの世に現われさせられるのである。・・・中略

大本の教主たちの筆舌につくしえぬ苦難のご生涯は、実に贖いのためであった。そのお徳によって重いめぐり

を背負う身も、大難を小難にとまつり替えられ救われるのである。このことを畏み感謝しまつるとともに、ただ、おのれの安穩と仕合わせをのみ求める境地から、さらに、世のため人のため苦難を甘受する信仰へと進まなければならない。すなわち、おのれを清めることからさらに人々を、世の中を清めることへと進むべきである。大本で毎年、行なわれている節分大祓の行事は天地、社会、人事万般に対する厳粛な潔斎の神事である。

【大本のおしえ】

第十五章 《天界旅行（二）》〔十五〕

現代語訳

74 神界の旅行と思ったのは私の間違いであったことを覚り、今度は心を改め、好奇心を戒め一直線に神界の旅程についた。

細い道路をただ一人、足をはやめて脇眼もふらず、神言を唱えながら進んで行く。そこへ「幸」という二十才くらいの男と「琴」という二十二才ほどの女とが突然現われて、私の後になり前になって付いてくる。そのとき私は非常に力を貰ったように思った。

その女の<sup>ほう</sup>方は今幽体《死者》となり、男の方はある由緒ある神社に、神官として仕えている《生きている》。その兩人には小松林、正守という二柱の守護神が付き添っていた。そして①小松林はある期間、ある肉体とともに神界で働くことになられた。

細い道路はだんだん広くなって、そしてまた行くに従ってすぼまって細い道路になってきた。たとへば扇をひろげて天と天とを合せたやうなものである。扇の骨のやうな道路は、75 幾筋となく広がっている。そのとき私はどの道路を選んでよいか途方に暮れざるを得なかった。その道路は扇の骨と骨との間のやうに、両側には非常に深い溝が掘られていた。

水は美しく、天は青く、非常に愉快であったが、それだからといって少しも油断はできない。油断をすれば落ちこむ恐れがある。私は高天原に行く道は、とても平坦な道だと思っていたのに、こんな迷路と危険の多いのには驚かざるを得ない。その中でまづ真中と思う小径を選んで進むことにした。

見渡すかぎり山もなく、何もない美しい平原である。その道を行くと幾つもの種々の橋が架けられてあった。中には壊れた危ないものもある。そういうのに出会った時は、「天照大神」の御神名を唱えて、ひと飛びに飛び越したこともあった。

\* そこへ突然現われたのが白衣の男女である。見るまに白狐の姿に変わってしまった。「琴」と「幸」との二人は同じくついてきた。急いで行くと、突然また橋のあるところに来た。橋の袂から真黒な四本足の動物が四五頭現われて、いきなり私を橋の 76 下の深い川に放り込んでしまった。二人の道連れも、共に川に放りこまれた。

私は道路の左側の溝を泳ぐし、二人は道の右側の溝を泳いで、元の道まで来た。前の動物は追かけて来て、また飛びつこうと狙うその時、急に二匹の白狐<sup>びやっこ</sup>が現れて動物を追い払った。三人はもとの扇形の処に帰り、衣服を乾かして休息した。その時大変大きな太陽が現われて、<sup>また</sup>隣くまに乾いてしまった。三人は思わず合掌して、「天照大神」の御名を唱えて感謝した。

\* 今度は三人が各自違う道をとって進んだ。「幸」といふ男は左側の端を、「琴」といふ女は右側の道をえらんだ。それはいざという時、この路であれば一方が平原に続いているから、その方へ逃げるための用意であった。私も中央の道を避けて三ツほど端の道路を進んだ。依然として両側に溝がある。先ほどの失敗に懲りて、両側と前後に大変注意を払って進んで行った。横にもまた沢山の溝があり、非常に堅くしっかりした石橋が架っている。不思議にも今まで平原だと思っていたのに途中からそれが山になり、山また山が連なった場面に変っている。

77 さうして其の山は壁のやうにそびえ立ち、鏡のやうに光っているだけでなく、滑って足をかける余地がない。そうだといって引き返すのは残念であると途方にくれ、ここで私は疑いはじめた。これは高天原にゆく道だと聞いているけれど、或いは地獄へ行く道と間違ったのでわあるまいかと。こう疑ってみると、どうしてよいか分らず、こまっていたため息をつきながら、「天照大神」の御名を声を出して申し上げ、「<sup>とな</sup>惟神霊幸倍坐世」を三回唱えた。

不思議にもその山は、少しなだらかになって、私は知らぬ間に、山の中腹に達している。幹<sup>みき</sup>の周り三メートル以上もあるような松や、杉や、<sup>ひのき</sup>桧の茂っている山道を、どんどん進んで登ると大きな滝の所に来た。白竜が天に登るような形をしている。

ともかくその滝で身を清めたいと、近よって裸になり滝に打たれてみた。たちまち私の姿は流れ落ちる滝のよ

うな大蛇になってしまった。私はこんな姿になってしまったことを、非常に残念に思っていると、下の方から私の名を大声に呼ぶものがある。姿は真黒な大蛇であって、顔は「琴」といふ女の顔であった。そして苦しきうに、ころげまわって暴れ狂っていた。よくよく見ると大きな目の玉は赤く充血して巴形の斑点が 78 両眼の白いところに現われていた。私は蛇体になりながら、女を哀れに思い救ってやりたいと考えていると、その山が急に大阪湾のような海に変わってしまった。そのうちに「琴」女の大蛇が火を吐きながら、大変な勢で、浪をたて海中に水音をさせ飛び込んだ。私は水を吐きながら、後を追いかけて同じく海に飛び込んで救うてやろうとした。けれど、ちょうど時速 18km の軍艦で、54km の軍艦を追うように速力が及ばないところから、だんだんと離されて救うてやる事ができない。そのうちに黒い大蛇はまっしぐらに泳いで遙か向こうへ行つて、黒い煙が立ったと思うと姿は消えてしまった。そうすると不思議にも海も山もなくなって、私はまた元の扇の要の道に帰っていた。

今度は決心して一番細い道を行くことにした。そこには人が五六十人と思われるほど集まっている。見るところ目の悪いもの、足の立たないもの、腹の痛むものや、種々の病人がいて何か一生懸命に祈っている。

道を塞いで何を拜んでいるかと思えば、非常に長い②年月を経た古狸を人間が拜んでいる。79 その狸は大きな坊主に化けている。拜んでいるものは、生きている人間ばかりであった。しかし一人も病気にたいして何ら効き目がない。私は狸坊主にむかって魂鎮（魂をしずめる）の姿勢をとると、その姿は煙のごとく消えてしまい、すべての人は皆病がなおった。芙蓉仙人に聞いてみれば、古狸の霊が、僧侶の姿をして現われて人を悩まし、そして自己を拜ませせていたのであった。その狸の霊を逐い払うとともに多くの人が救われ、盲人は見え、跛（びつこ）は歩み、霊魂が畜生道の仲間に入るのが助かったのである。

多くの人は非常に感謝して泣いて喜び、すがりついて一步も進ませてくれない。それなのに天の一方からは「進め、すすめ」の音が聞えるので、天の石笛を吹くと、何もかも跡形もなく消えて、扇の紙のやうな広い平坦なところに進んでいた。

扇形の道は何を意味すのか解らない。

狸が人を化かすと云うが、年を経た動物は人を欺すようだ。神霊を知らない人は簡単に動物霊に欺される。みだりに間違つた信仰に入るものではない。

## 用語の解説

### ① 小松林

大本神諭 明治 36 年旧 6 月 14 日 に

『女子は緯の御役であるから、横は女役であるぞよ。この役もなかなか辛いお役、是が身魂の性来、この緯役は小松林の守護の間は、男子を敵対うて、大変此の大本苦しみたぞよ。日本と外国とに喩へてありたから、此の大本が辛かりたのぞぞよ。是は皆天からのお役であるぞよ。知らず知らずに皆させられて居るのぞぞよ』 【神諭 明 36.6.14】

以上から判るように、一時聖師を守護した神霊である。神島開きの折の神諭には天のミロク様と表わされている。

### ② 劫を経た《年月を経た》狸を人間が拜んでいる

月鏡 433 「人に化けた狸」に

福知山にての出来事であるが、開祖様が十七八歳の頃一人の背の高い大坊主が住んで托鉢をやつて居た。五六年も其土地に居たので誰もが人間だと思つて居た。然るに或日の事某侍（ぼうきむらい）が彼と話しをして居る中、耳が頻りに動くので其故を問うと、風が吹くからだと云ふ、風が吹いて耳が動くとは怪しい、狸の類（たぐい）が化

て居るのに相違ないといきなり<sup>ぬくて</sup>拔手も見せず斬りつけて殺して仕舞つた、そして屍を川原に<sup>さら</sup>曝しておいた、夜が明けると人間の姿であつた大坊主はダンダンと変つてたうたう狸の姿になつて仕舞つた、開祖様も実地に見に行かれたさうで、時々其事を話してをられた。 . . . . .

狸が人間に化けて居るか、どうかと云ふ事を見るためには、<sup>そば</sup>傍で<sup>す</sup>マツチを擦つて見るとよい。狸なら毛がやけるから恐れて逃げる。又体を<sup>さか</sup>逆さまに撫でて見ても毛がモジヤモジヤと生て居るから分るものである。

（以上は過日<sup>毎</sup>某新聞紙上に狸を夫と思うて同棲した女といふ記事が出て居たのでかかる事もあるものにやとお伺ひした時のお話であります。）



第十六章 《天界旅行（三）》 [十六]

現代語訳

一、

80 扇でたとへると丁度骨を渡って白紙のところへ着いた。ヤレヤレと一息して傍<sup>かたわら</sup>の芝生の上に身を横たえて一服していた。するとほるか遠く北の方から、細い幽かな悲しい蚊の泣くような声で、「オーイ、オーイ」と私を呼びやらしい声がしてきた。私はどうしようかと困っていると、南の方の背後から四五人の声で私を呼び止める者がある。母や祖母や隣人の声にどこか似ている。フト南の声に気をとられ気が付けば、私の身体はいつのまにか穴太<sup>あなお</sup>の自宅へ帰っていた。

これは幽界のことであり、母の後に変な顔をした、非常に悲しそうに、しかも腹を立てたような、一口に言えば怒ったのと泣いたのが一緒になったような顔をした者が付いている。それが母の口を通していうには、『今かうして老いた母や子供を放っておいて神界の御用にゆくのは結構だが、祖先の後を守らなければならない。それに今お前に出て行かれたら、八十を超えた老婆がいて、たくさんの 81 農作業を私一人でやらねばならぬ。とにかく思い止まってくれ』

と私を引き止めて、行かそうとさせない。そこへまた隣の家から「松」と「正<sup>まさ</sup>」といふ二人が出てきて、祖先の代わりとして意見すると言ってさかんに止める。二人は、

『お前、神界とか何とか言ったところで、家庭を一体どうするのだ』

と喧<sup>やかま</sup>しくやりこめる。その時すぐに老いた祖母の衰<sup>おとろ</sup>えた姿が男の神様に変ってしまった。そして、

①『お前は神界の命令によってするのであるから、小さな自分や家族の事は気にかけるな。世界を此のままに放っておけば、混乱状態となって全滅するよりほか道はないから、神界、幽界、現界の三界のためにつつしんで神命を受け、一時も早くここを立ち去りなさい』

と戒められた。するといきなり「松」と「正」とが私の羽織袴を奪って丸裸にし、それから鎮魂の玉や天然笛を引たくって池の中へ放り込んでしまった。そこへ「幸」といふ男が出てきて、いきなり自分で裸になり、その衣服を私に着せてくれ、天然笛も鎮魂の玉も池の中から拾って私に渡してくれた。

二、

82 私は総ての執着を捨てて、神命のままに北へ北へと進んで、知らない間にまに元の天の八衢へ帰っていた。これは残念なことをしたと思ったが、もと来た道をすうと通って、扇形の道を通りぬけ白紙の所へ辿りついた。その時、「幸」が白扇の紙の半分ほどのところまで裸のまま送って来たが、そこで何処ともなく姿を消してしまった。そして相変わらず、細い悲しいイヤらしい声が聞えて来る。その時、私の身体は電気に吸いつけられるやうに、北へ北へと進んで行く。一方には大きな河が流れており、その河辺には面白い老松が並んでいる。左側には絶壁の山がそびえ立って、一方は河、一方は山で、其処をどうしても通らなければならない咽喉首<sup>のどくび</sup>である。その咽喉首の所へ行くと、地中から頭をヌツと出し、ついには全身を現し、狭い道に立ち塞がって、進めなくさせる男女があった。

そこで鎮魂の姿勢をとり天然笛を吹くと、二人の男女は穏やかで素直な顔付になって、女は私に一礼し、『あなたは予言者のやうに思いますから、私の家へお入り下さいませ。色々お願いしたいことがございます』

83 と言った。その時フト小さな家が眼の前にあらわれてきた。その夫婦に②八頭八尾の守護神が憑依（霊がのりうつる）していた。夫婦の話によれば、

『大神の命令により神界旅行の人を幾人も捕まえてみたが、自分の求める本当の人に会わなかったが、はじめて今日目的の人に出会いました。実は私は、地の高天原に居られて幽界を治められる大王の肉親の者です。どうぞ貴方はこの道を北へ北へと進んでいって下さい、そうすれば大王に面会ができます。私から聞いたと言って下さい』と言って頼む。『承知した、それなら行って来よう』

こう言って立ち去ろうとする時、男女の後に角の生えた怖い顔をした ③天狗と、白狐の ②-2 金毛九尾になっ

たのが眼についた。この肉体としては実に善い人間で、信仰の強い者だが、その背後には、大変な悪魔が取りついていることを悟った。

三、

そのまま私は一直線に地の高天原へ進んで行った。トボトボと暫くのあいだ北へ北へと進んでゆくと、84 一つの木造の大橋がある。橋の袂へ来ると川の向う岸付近で、不思議な人間の泣き声や狐の声が聞えた。私はその声をたどって道を北へ向かって行くと、親子三人の者が寄り集まって、穴の中にいる四匹の狐を叩き殺していた。見ている間に狐は殺され、同時にその霊は女に憑いてしまった。女の名は「民」という。女は狐の怨霊（怨みをもった霊）のためにたちまち腹が腫れて腹膜炎のような病気の体になり、突然苦しみはじめた。そこでその膨れた女にむかって、私は両手を組んで鎮魂をし、神明に祈ってやると、その体は元の健康体に返り、三人は合掌して私にむかって感謝する。しかしあの殺された四匹の狐の霊はなかなか承知しない。

『罪のないものを殺されて、これで黙ってはおられないから、あくまでも仇討をしないわけにはいかない』と、怨めしそうに三人を睨みつけている。狐の方はその肉体を使って、四匹とも体に入って生活を続けてゆきたいから、神様に願って許していただきたいと願った。

私はこの場の処置に迷って、天にむかい善い悪いの判断をお願いした。すると天の一方より天使が現れ、85 産土の神も現れなさって、『仕方ない』

と一言仰しゃられた。氏子であるとは言いながら、罪のないものを打ち殺したこの女は、④畜生道へ墮ちて狐の容器とならねばならなかった。病気は治ったが、きわめて熱い苦しみと極めて寒い苦しみを受け、数年後に死亡した。この世で言えば⑤稲荷下のやうなことをやったのである。

四、

少し西南の方向に、また異常な叫び声が聞えてきた。すぐさま私は声を尋ねて行ってみると、めくらの親爺に狸がとりついて、また沢山の怨霊が彼をとりまいて、眼を痛めたり、空中へ身体を引き上げたり、さんざんに親爺を虐めている。見ると親爺の肩の下のところには棒のようなものがあって、それに綱がかかっており、柱の芯に取付けられた太綱を寄ってたかって、弛めたり引きしめたりしているが、落下する時は川の深みにつけられ、つり上げられる時は、太陽の熱にあてられる。そして釣り上げられたり、曳きおろされたりする上下の速さ。この親爺は「横」という男である。

なぜこんな目に遇うのかと理由を聞けば、この男は非常に強欲で、他人に金を貸しては 86 家屋敷を抵当にとり、ほとんど何十軒ともわからぬほど、その方法では財産を作ってきた。そのために井戸に落ちたり、首を吊ったり、親子兄弟が離ればなれになったりした者など沢山にいる。その霊が全て怨みのために畜生道へ墮ち、狐や狸の仲間入りをしているのであった。そのすべての生きている人の怨みの霊や死んだ人の霊が、身体の中からも、外からも、攻めて攻めて最後まで攻めて命をとりきいているのである。

どうして神界へ行く道に、地獄道のやうなことをしているのを神がお許しになっているかと問えば、天使の説明には、

『こらしめのために神が許している。その長い太い綱は首を吊った者の綱が固まったのである。毒を飲んで死んだ人があるから、毒が身体の中に入っている。川へはまった者があるから川へ突っ込まれる。これが済めば畜生道へ墮ちて苦しみを受けるのである』

と。あまり可愛相なので私は天照大御神へお願いして「かながらたまちはえませ惟神霊幸倍坐世」と唱へ天然笛を吹くと、その苦しみはたちまち治まった。そして狐狸に変化していた霊は嬉しそうに苦しみから解放された。その顔は桜色を呈してきたものもある。これらの霊はすべて 87 老若男女の人間にすっかり変ってしまった。すると産土の神が現われて喜び感謝された。私もこれは善い修業をしたと神界へ感謝し、そこを立ち去った。が、「横」といふ男の肉体は一週間ほど経てこの世を去った。

五、

それからまた真西の方で叫び声がおこる。猿をいじめるような叫び声がする。その声を尋ねてゆくと、本当の

狐が数十匹集まり、一人の男を中において木にくくりつけ、「キヤツ、キヤツ」と言はして苦しめている。その男の手足はもぎとられ、骨は一本々々砕かれ、滅茶々にやられているのに現界に肉体が残ったままそこに立っている。私はこれを救うため、神名を謹んで申し上げ決められた形で鎮魂の姿勢をとるとすぐ、すべての狐は両手をつき、頭を地につけて礼拝してしまった。何故そんな事をするのかと尋ねれば、中で年をとった狐がすすみで、『この男は山で猟をすることが飯よりも好きで、狐を捕まえる落とし穴を作ったり、罠をこしらえたりして楽んでいる悪い奴です。それがために吾々一族のものは皆命をとられた。生命をとられるとは知っていても、油揚げなどの好きな物があればつい罠にかかって、ここにいるこれだけの狐は皆、命をとられました。それでこの男の魂も肉体も共に亡ぼして、88 精霊界で十分に復讐したい考えである』という。そこで私は、『命をとられるのは自分も悪いからである。それよりはいつそ各自に心を入れ替えて人に生れ変わったらどうだ』と言えば、『人に生れ変わる事が出来ますか』と尋ねる。私は、『生れら変われるのだ』と答えれば、『自分らはこんな四ツ足だから駄目だ』といふ絶望の気持ちを表情で現わしたが、私は、『お前達に代って天地へお詫をしてやろう』と神々へお詫をするとすぐ、「中」といふ男の幽体は見るまに肉もつき骨も完全になって 89 元の身体に<sup>かえ</sup>復り、いろいろの狐はたちまち男や女の人間の姿になった。その時の数十の狐の霊は、一部分は今日でも神界の御用をしているものもあり、途中で逃げたものもある。中には再び畜生道へ<sup>お</sup>墮ちたものもある。

一、

聖師は高熊山修行の後、神業のため家を外にして宣教に出歩いていた。実質、弟の吉松さんが農事、家事一切を行っていたので、近所や周囲から視ると家出をした様な状態であった。そこで穴太の家に連れ戻され株内（町内に於ける班のようなものか）から責められたのである。しかし、祖母の宇野さんだけは理解者で『お前は神界の命令によってするのであるから、小さな自分や家族の事は気にかけるな。世界を此のままに放っておけば、混乱状態となって全滅するよりほか道はないから、神界、幽界、現界の三界のためにつつしんで神命を受け、一時も早くここを立ち去りなさい』といさめられます。

二、

『大神の命令により神界旅行の人を幾人も捕まえてみたが、自分の求める本当の人に会わなかったが、はじめて今日目的の人に出会いました。実は私は、地の高天原に居られて幽界を治められる大王の肉親の者です。どうぞ貴方はこの道を北へ北へと進んでいって下さい、そうすれば大王に面会ができます。私から聞いたと言って下さい』ここに出てくる男女は開祖の三女で、八木に嫁いだ福島久と男はその夫虎之助です。久は開祖の教えを表に出してくれる人が東から来るとの筆先により、峠に茶屋を営み筆先に示された人を捜していたのです。地の高天原は綾部であり、開祖のお住まいである。大王は開祖に懸かれた良の金神国常立命である。肉親の者は国常立命＝開祖から来ているが肉体上のことで霊的には対極にあります。

この二人には八頭八尾の大蛇（邪神）が守護しており、久には金毛九尾白面の悪狐が憑き、虎之助には天狗が憑いていたのです。この後聖師が出口家に入られてからはこの邪神に使役され、聖師に対して猛烈に反対するのです。物語に出てくる常世姫や高姫はこの久に<sup>つ</sup>憑依していた霊であろう。

三、

この話は現代の我々にはなじみのない話であるが江戸から明治に掛けて多く視られた狐憑きの話であろうか。むやみに罪のない動物を殺生すると、その動物の霊に恨まれるのは当然で、三寒三熱の苦しみを受け数年後には、畜生道へ<sup>お</sup>墮ちて行った。その間しばらくは狐を使って稲荷下げのようなことをしていたようです。

四、

「横」と云う親父は強欲のため人を苦しめ、その恨みで、

「その靈が全て怨みのために畜生道へ墮ち、狐や狸の仲間入りをしているのであった。そのすべての生きている人の怨みの靈や死んだ人の靈が、身体の中からも、外からも、攻めて攻めて最後まで攻めて命をとりききているのである。」とあります。聖師の救済により、恨みを持った靈はみな救われます。

三や四でわかるように全て人や動物の恨みは、苦しめた側に返ってくるのですが、さらに苦しめられた側も恨みを抱けばまた自分に返って来ます。従って、基本宣伝歌にあるように「直日に見直し、聞き直し、身の過ちは宣り直せ」通り許すことが大切です。

原文 85 ページ下 3 行、「そして釣り上げられたり、曳き下ろされたりする上下の速さ」？。この速さの後に文章が続くように思うのだが、速いのか遅いのか、又別の表現があるのか。

五、

「この男は山で猟をすることが飯よりもすきで」とある。猟師や漁師は職業であるから獲物を捕っても罪とはならないが、趣味で鉄砲を撃つたり、釣りをすることを神様は禁じておられます。

「それよりはいつそ各自に心を入れ替えて人に生れ変わったらどうだ」とあります。人の中には動物靈から魂の向上をはかり人に生まれてきた人もいます。

第 32 卷 第 13 章「平等愛」に以下の文書がある、少し長いが参考にされたい。

これより其律法を遵守し、月の大神の宮に詣でて赤誠を捧げたるものは、一定の肉体の期間を経て帰幽《死》するや、直に其靈は天国に上り、再び人間として地上に生れ来ることとなりぬ。

又此律法に違反したる各獣は、其子孫に至る迄、依然として祖先の形体を保ち、今に尙人跡稀なる深山幽谷森林などに、苦しき生活を続けてゐるのである。あゝ尊き哉、月の大神の御仁慈よ。

国治立大神《国常立大神》は、あらゆる神人を始め禽獣《鳥と獣》虫魚に至る迄、其靈に光を与へ、何時迄も浅ましき獣の体を継続せしむることなく、救ひの道を作り律法を守らしめて、其靈を向上せしめ給へり。故に禽獣虫魚の帰幽せし其肉体は、決して地上に遺棄《すてる》することなく、直に屍化の方法に依つて天に其儘昇り得るは、人間を措いて他の動物に共通の特権である。猛獣は云ふも更なり。鳥、鳶、雀、燕其外の空中をかける野鳥は、決して屍を地上に遺棄し、人の目に触るる事のなきは、皆神の恵に依りて、或期間種々の修業を積み、天上に昇り、其靈を向上せしむる故なり。只死して其体軀を残す場合は、人に鉄砲にて撃たれ、弓にて射殺され、或は小鳥の大鳥に掴み殺され、地上に落ちたる変死的動物のみ。其他自然の天寿を保ち帰幽せし禽獣虫魚は残らず神の恵によりて、屍化の方法に依り天上に昇り得る如きは、天地の神の無限の仁慈《なさけ》、偏頗《不公平》なく禽獣虫魚に至る迄、依怙なく均霑《各人が平等に利益を得る》し給ふ証拠なり。只人間に比べて、禽獣虫魚としての卑しき肉体を保ち、此世にあるは、人間に進むの行程であることを思へば、吾人は如何なる小さき動物と雖も、粗末に取扱ふ事は出来ない事を悟らねばならぬ。其精神に目覚めねば、眞の神国魂となり、神心となることは到底出来ない。又人間としての資格もない。

斯く曰はば人或は云はむ、魚を捕る漁師なければ吾等尊き生命を保つ能はず、獣を捉ふる猟夫なければ日常生活の必需品に不便を感じず、無益の殺生はなさずと雖も、有益の殺生は又已むを得ざるべし。斯かる道を真に受けて遵守《決りを守る》することとせば、社会の不便実に甚しかるべしとの反対論をなす者がキツト現はれるであります。併し各自にその天職が備はり、猫は鼠を捕り、鼠は人類に害をなす恙を捕り喰ひ、魚は蚊の卵を食し、蛙は稲虫を捕り、山猟師は獅子、熊を捕り、川漁師は川魚を捕り、海漁師は海魚を捕りて、其職業を守るは皆宿世《前世》の因縁《物事の生ずる原因。縁》にして、天より特に許されたるものである。故に山猟師の手にかかる禽獣はすでに天則を破り、神の冥罰を受くべき時機の来れるもののみ、猟師の手に掛つて斃れる事になっているのである。海の魚も川魚も皆其通りである。

然るに現代の如く、遊猟と称し、職人が休暇を利用して魚を釣り、官吏その他の役人が遊猟の鑑札を与へられて、山野に猟をなすが如きは、実に天則違反の大罪と云ふべきものである。自分の心を一時慰む

る為に、貴重なる禽獸虫魚の生命を断つは、鬼畜にも優る残酷なる魔心と云はなければならぬ。人には各天より定まりたる職業がある。之を一意専心《一生懸命》に努めて、土農工商共神業に参加するを以て、人生の本分とするものである。

ペストが流行すると云っては、毒薬を盛り鼠を全滅せむと謀る人間の考へも、理論のみは立派なれども到底之を全滅する事は出来ない。又鼠が人家になき時は人間の寢息より発生する邪氣、天井に凝結して小さき恙虫を発生せしめ、其虫の為に貴重なる生命を縮むる様になって了ふ。神は此害を除かしめ、人の為に必要に応じて鼠を作り給うたのである。鼠は恙虫を最も好むものである。故に其鳴声は常に『チウチウ』と云ふ。チウの⑥靈返しは『ツ』となる。併し乍ら鼠の繁殖甚しき時は、食すべき恙少き為、止むを得ず、米櫃を齧り、いろいろと害をなすに至る。故に神は猫を作りて、鼠の繁殖を調節し給うたのである。猫の好んで食するものは鼠である。鼠の靈返しは『ニ』となる。猫の鳴声は『ニヤン』と鳴く、『ヤ』は退ふこと、『ン』は畜生自然の持前として、言語の末に響く音声である。故に『ニヤン』と云ふ声を聞く時は、鼠の『ニ』は恐れて姿を隠すに至るは言靈学上動かすべからざる真理である。人試みに引く息を以て、鼠の荒れ廻る時、『ニヤン』と一二声猫の真似をなす時、荒れ狂ひたる鼠は一時に静まり遠く逃げ去るべし。『ニヤ』の靈返しは『ナ』となる。故に猫の中に於て、言靈の清きものは『ナン』と鳴くなり。

【32/13 平等愛】

人は現界にあつても靈界と繋がっていることがわかる。顕幽一致であるから、決して現界は現界、靈界は靈界と思つてはいけません。罪を犯せば、その恨みを買つた人や動物によって生前においても苦しめられるのです。聖師は多くの病は靈的原因によるもので、肉体の疲労等による病氣は直ぐ治ると書かれています。罪は死後もなお続きそれを贖うために相応の場所に赴くのです。

用語の解説

① 「汝は神界の命令によってするのであるから」

正に聖師の使命が示されています。時期遅れれば世界は全滅する危機にある。顕幽神の三界を救うのが聖師の使命です。現今の日本及び世界の状況を見ていると物質的方面から見ると、極めて豊かで、全ての点で昔より優れているように見えます。しかし第三九卷序歌に示されたように、人の心は荒びそれとは反対の方向に激しく進んでいるようです。聖師の使命だけでなく、本当の意味で今の我々大本人の使命を忘れてはいないでしょうか。

② 八頭八尾の守護神が憑依

物語には世界に三種の邪神があり、ロシアに発生した八頭八尾の大蛇、インドに生まれた金毛九尾白面の悪狐、そしてユダヤに発生した六面八臂の邪鬼です。これらの邪神がこの世を乱しているのです。

◇②-1 八頭八尾の大蛇

露国に発生。一つの蛇体に八つの頭があり、また尾が八つあるにあらず。蛸や烏賊や、蟹には足が八つもあるが、蛇体には偶に尾の先二つに裂けて固まれるが有りても決して八つの岐になり居るものなし。仏書に九頭竜などといひ、九つの頭のある竜のことが示しあれど、これも全く象徴的の語にして、神変不可思議の働きをなす竜神といふ意味なり。昔から「長いものには捲かれよ」といふ譬あり。大蛇は他の動物に比して身の丈もつとも長く、かつ蚯蚓のやうに軟弱ならず相当に堅き鱗をもちて身体を保護し、沢山の代用足を腹部に備えあるなり。腹部の鱗と見ゆるは、みな蛇の足の代用をするものなり。足は下を意味す。ゆゑに上に立ちて下を指揮するものを長といひ、また長者ともいふなり。この大蛇の靈は世界の各地にその分靈を配り、千変万化の活動をなし、神人の身体を容器として邪惡を起さしむる悪靈の意なり。

◇②-2 金毛九尾の悪狐

〔印度においては、極陰性の邪氣が凝り固まって金毛九尾白面の悪狐が発生した。〕 狐としては黄金色の光沢ある硬き針毛を有して居るが、化現するとき美しき女人の体を現はし優美にして高貴なる服装を身に

纏ひ、すべての神人を驚かしめ、その威厳に打たれしめむとするをいふなり

◇六面八臂の邪鬼

〔猶太に発生、全世界を妖魅界にしゃうとする邪気〕。一つの身体に六個の頭や顔の付属せるにあらず。ある時は老人と化し、ある時は幼者と変じ、美人となり、醜人と化し、正神をよそほひ、ある時は純然たる邪神と容貌を変じ、もって神変不思議の魔術をおこなふ者の謂にして、また八臂とは一つの身体に八つの臂あるにあらず。これを今日の人間に譬ふれば、一つの手をもって精巧なる機械を作るに妙を得てをり、書に妙を得てをり、絵画に堪能してをり、音楽に妙を得てあるとか、一切の技術、技能を他に勝れて持ち居たる手腕の意なり。強ち八種のことに妙を得たりといふ意味でなく、一切百種の技能に熟達し居るの意義なり【4/36 天地開明】

③ 天 狗

水鏡 419「天狗」より

天狗にも種々の階級があるが、人間界に於て責任を果さず、行が成功しなかつたものが霊界に入つて行をして居るので、竜神と同じく三寒三熱の苦しみを受けて居るのである、地獄界の中に住するのではなく、肉体的精霊界に住するものである。行終つて後再び人間界に生れて来るもので、それから人間界の行を完全に仕遂げたならば、天国へ入つて天人の列に加はる事を得るのである。

④ 畜生道

畜生道は牛馬など畜生の世界である。ほとんど本能ばかりで生きており、使役されなされるがままという点からは自力で仏の教えを得ることの出来ない状態で救いの少ない世界とされる。 【ウイキペディア】

⑤ 稲荷下

「稲荷下げ」などといって、修験者や巫者がキツネを神の使いの一種とみなし、修法や託宣を行うといった形式での狐憑きもある。キツネに対する信仰の厚さは、キツネを稲荷神やその使いとみなす稲荷信仰、密教徒や修験者が行う茶枳尼天法、巫者や行者がキツネを使って行う託宣に示されており、これらの信仰を背景として狐憑きの習俗が成立したものと見られている。 【ウイキペディア】

⑥ 霊返し

第23章の用語の説明 ③返しを参照

良き土地も耕<sup>たがや</sup>さざれば荒れ果<sup>は</sup>てむ  
人の心もそれと同じき

忍<sup>しの</sup>び難<sup>がた</sup>き事を忍びて神の道に  
進めば安し榮の花あり

常<sup>とこやみ</sup>暗の夜にもまがへる人心  
狐狸も舌を巻かなむ

かくり世のこと細やかにしるしたる  
書<sup>ふみ</sup>は靈<sup>みたま</sup>魂の力なりけり

世の中の知識を捨てて<sup>かむながら</sup>惟神  
胎藏教<sup>の</sup>を宣<sup>まさ</sup>ぶる真人<sup>びと</sup>